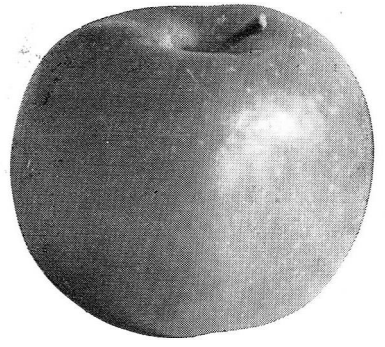


牧草と園藝

秋植苗木球根類
特集号





りんごの植付について

福 島 住 雄

りんごの栽培が始まってから八十余年を経過した今日では、早く植えられたものは既に老齢化して生産力が落ち、またモンパ病などで枯死したところでは園内に空地が出来ているので、古い樹を若木に代え、また、欠木を補つてりんご園の生産量の維持向上を図らなければならない。

更にまた、近時、りんごに対する需要は次第に高まり、各地共増殖されているので、市場の要求に応えるような品種で、市場価値の失われた品種を更新し、また、新しく開墾された土地に植付けがされなければならない。

りんごは植付けてから七〜八十年の長期間に亘つて栽培され、その途中で他品種にかえることは容易でないで、新植する際に長い将来の経済性について十分考慮されなければならない。それと同時に同じ土壌からその樹の一生に亘つて養水分を吸収するのであるから、その間に亘つて樹に十分な生産力を發揮させるような土地の準備をすることが非常に大切なことである。

まず、生産力の落ちた老木園をどのようにして若木に切りかえるかということが問題になる。

一 老木園の更新

りんごの樹は三十年代が盛果期といわれ四十、五十年代では老化して来るものが出てくるが、この時代の老衰は多く管理不良の結果であつて、薬剤散布の徹底、敷薬の実施、また施肥量の増加等で生産力を恢復させることが出来る。この際、これらの管理の効果が直ちに生産力にあらわれるものではなく、初年はまず幹が太り、二年目には葉、三年目には枝というふうにして四年目頃で収量への効果があらわれて来るものであるから、自分の園がこのような管理で恢復出来るものかどうかをみきわめ、新植の方が有利と考えられる場合は更新にかからなくてはならない。

老園更新の最も良い方法は、老木を一度に全部切り倒し、一〜二年緑肥をつけて地力を恢復した後に苗を植えつけるのであるが、老木が多少とも生産をあげておればなかなか思ひきつてこのような方法をとれぬ

好である。

最も消極的な方法としては現在の老木の対角線上

か、または更新しなければならぬ樹の側に植えるのであつて、現在

一般にこの方法がとられているが、日光の照射が不十分になりやすく、また苗木を植えるための土壌の準備を十分行なうことが出来ない欠点がある。

二 新植地について

新しい土地に植えつける場合は、その土地がりんごの栽培に適しているかどうかを吟味しなければならない。りんごはむしろ酸性に傾いた土壌が好適であり、土中に盤のある場合はあらかじめこれを壊さなくてはならない。

気候的な面からみれば、霜害、風害、旱

のが人情である。これよりも少しく保守的な方法としては老齢化したものを毎年幾本かずつ更新してゆく方法であつて、この場合は園の樹齡が揃わぬ欠点があるが、新植された苗木は十分な日光を得て発育も良

害、凍害等が起らない場所であればよいが品種の選択、または栽培管理によつてこれらの障害を防止出来るところを選びたい。薬剤散布はりんご栽培上剪定及び土壌管理と共に重要な作業であるから、年間の薬剤散布に必要な水の供給源も考えなければならぬ。

老園の更新計画または新植地の決定が了つたら植付の準備にうつる。

牧草と園芸 八月号 目次

◆表紙写真	—— 味覚の秋も間近か	—— 北海道新聞社提供
◇りんごの植付について	福島住雄	二
◇和梨の品種	岩垣 駿夫	四
◇ブドウ免砒についての考察	赤羽 紀雄	六
◇秋植球根の植込み	明 道 博	八
◇品種を中心にした草毒の話	高 井 隆 次	二
◆秋植苗木類目録		三
◆秋植球根類目録		六

三 植付の準備

1 土地の消毒と植穴の準備

りんごは結実期に入るころから盛果期にかけてモンパ病に侵され、長年の苦心が水泡に帰することが多い。これを防ぐためには、モンパ菌のいる土壌や、跡地に止むなく植えつける場合は土壌中の菌を殺しておかなければならない。

モンパ病には白紋羽病と紫紋羽病の二種類があり、それに対する処理は異なつてゐる。

跡地に植えつける場合は、園地を完全に

掘り起し、被害根は大小をとわず丁寧にとり除く。

次に、植えつけた苗木が良く発育するためには根が深くまで入るようにしなければならぬ。このためには植付前に土壌を深く耕し根が十分発育出来るような状態にすることが大切である。植穴は直徑六尺、深さ三尺以上に掘り、有機物五十貫以上をよく土と混和しながら入れる。十分熟さぬ堆肥を入れれば深い所のは腐熟が進みにくいのでよく熟したものをい、穴は埋めた当時水平にならせばあとで陥没するので盛り上った状態にした方がよい。

植穴の準備が了つたら土壌の消毒を行うのであるが、まず消毒する土地全面に亘つて二尺平方一個所の割で深さ一尺、直徑一寸の穴をあけ、この穴に、白紋羽菌に対してはクロールピクリン原液一〇〇〜一五〇〇C 紫紋羽菌及び根朽病に対しては二硫化炭素三〇〇Cを注入し、土で穴の口をふさぐ。葉の効果は温度が摂氏二十度以上の時に効果が多い、また処理後三週間は植付けが出来ないので、八月中にこの作業を行えば好都合である。

また、園地内の一部だけに消毒を行う場合は、この薬がガス体になつて地中で下方五尺、側方二尺位に拡がり、このため健全樹を殺すことがあるので健全樹の樹冠下から三尺以上離れて処理しなければならない。

2 一反歩の栽植本数

一反歩の栽植本数及び植え方は経営法やその地方の氣候、地勢、地力により、また品種によつて異なるが、枝条が全園に拡が

つた場合には今日の剪定法では収量と栽植本数の関係はなくなる。従つて早く全園を枝条でおおうためには一反歩の栽植本数が多い方がよいのであるが、極端に樹間がせまい場合には結実しない中に、隣樹と枝が交錯するようになりかえつて損である。それ故反収をあげるためにははじめ三間の方形植にして樹の発育にしたがい、斜に間伐して六間に四間二尺五寸にするのが有利と思われる。結実が始まるとかく窓が出て、なかなか間伐出来ぬものであるが、新植の際はつきりと間伐の計画をたて、間伐は残されるものより低くするように育てなければならぬ。

3 品種の選択

品種は一度栽植すれば容易に他品種にかえることが困難であるから、新植する際に商品価値高く、かつ、自からの地域に適應したものを選ぶことが大切である。

開花から果実成熟までの期間は品種により大いに異なり、生育好適期間の短い地方で晩熟種を栽培すれば発育が劣り、完熟できないので、北海道においてはむしろ早生種、中生種に重きを置いた方が有利と思われ、また、着色を計るために枝交りの優良系統のものを選ぶなければならない。

品種を選ぶ場合に今一つ大切なことは単植をさけることであつて、りんごは他花受精でなければ結実が悪く、また種子の入り方が少なれば落果が多くなり、果実の形や発育が不良になる。これを防ぐためには開花期の近い品種を混植する必要があるが、無計画に混植すれば管理が不便になる

ので同一品種を何列か植え、その間に授粉樹の列をまぜるようにした方がよい。米國での例をみると、結実の悪い地方においては三列毎に、結実の良い地方においても四列目毎に一の授粉樹を入れるのが基準になつてゐる。品種の中、結実にくいデリシャスについては特にこのことが考えられなければならない。また授粉樹は間伐後に残されるものについて、初期の目的がかなうようにしておかなければならない。

四 苗木の管理

1 消毒

土地は消毒されていても苗木に菌がついていたため発病することがあるので、苗木は栽植前にウスブルン、ルベロン、またはリオゲン等の有機水銀剤一、〇〇〇倍液に二時間位つけて消毒しなければならない。

2 苗木の剪定

苗木は輸送中に根が切れたり、また掘取つた場合の切断により、地上部の発育に比して地下部の発育が劣つており、一方栽植後の幼木の発育は発生する新根に比して地上の葉が少ない方が良くなるものであるから、購入した苗木をそのまま植えつけば地上部の発育は悪くなり、将来の主枝構成にも不都合であるから、良い主枝候補枝の発育を促すために接部から三尺位の所で切返す。徒長した苗では下方の芽が弱く一年目の発育は思わしくないが、管理がよければ二年以後において恢復して来るものである。地上部と同時に地下部も剪定する必要があり、栽植後の発根はハサミで切断した

切口の反対側から出やすいので側方からのびた根は切口が下をむくように斜に切断し、接部までが土にうまるようにして、根は発出した方向に掘り覆土する。

マルバカイドウの砧木を用いれば将来高接した際、高接病の出るおそれがあるのでミツバカイドウ、または共砧の苗木を選んだ方がよい。

五 植付後の管理

若木は将来多収になる樹形をつくる準備期であるから、徒らに早く結実させることを願つことなく、樹が旺盛な発育をするような管理をしないでなければならない。このためには栽植一年で根は一米余り伸びるものであるから根の伸長範囲に厚さ三寸位の敷葉を行い、肥料は春から夏期にかけて分施しなければならない。

また冬期間のウサギ、ネズミ等の害を防ぐために根ぎわをスキの葉、金網、竹等で保護し、雪折れを防ぐためには支柱を立て、分枝したものは枝を集めて結束しなければならない。

六 栽植の時期

植付は春または秋に行うが、暖地では秋に植付ければその年の中に幾分根の伸長を期待できるが、雪の多い地方、または寒地では、凍害、雪害をうけやすいので冬期間は一カ所によせておき、春早くうえた方がよい。

(青森県りんご試験場・技師)